

主な使用場面・領域・教科等：自立活動

<図・写真>



<材料・製作方法等>

廃棄座位保持用テーブル すのこ
木材 蝶番 ノブボルト 鬼目ナット
ヒートン ゴム ボール等玩具

すのこの不要部分を切る。板や木材で2面が開いたボックスを作り、すのこにビス留めする。テーブルとすのこの間に小さな板を2枚、それぞれ左右両端に当て、すのこ板を蝶番でつなぐ。小さな板に穴を開け、その下のテーブル部に鬼目ナットを埋め込む。穴にノブボルトを入れ、鬼目ナットへ締め込む。すのこにヒートンを取り付け、ボールとヒートンをゴムでつなぐ。

<ねらい>

○強い力や大きな動きで物を放りがちな子供がプットイン活動に取り組めるようになる。

<指導方法・留意点等>

- ①ボックス内に電動スクーターボードを操作する平型スイッチを置き、ボールがボックスに入るとスイッチが押され、電動スクーターボードが動くよう設定する。
- ②ボックスのどこにもボールが入ってもスイッチ上に転がるよう、スイッチ両脇に三角ブロックを置く
- ③前開口部から教師が手を入れ、上開口部に出す。「ちょうだい」と呼び掛けることで、ボックス上へボールを持っていこうとする動きを引き出す。

<指導経過・成果・課題・展望等>

ボールを後方に放ろうとするもゴムによってそれができないとわかると、横や斜め前に落とそうとした。まっすぐ前に落とそうとしない時点で、前方ボックスを意識しているのがわかった。ボックスから手を出して「ちょうだい」と呼び掛けると、何も持たず手を握りに来るようになった。

第1時では自らボールをボックスに入れることはなかったため、教師の支援でボックスに入れる動きを10回繰り返した。第2時ではボックス縁に置いたボールに手が触れた瞬間ボックスに入り、電動スクーターボードが動き出したことから、縁に置かれたボールは突き落とす動きを繰り返すようになった。

学習を重ねるうちに、腹部の前に置かれたボールでも左手でつかみ、前方へ落としたり投げたりする動作が定着した。ゴムを外したボールでも同様に扱うことができつつあり、自立活動以外の場面でも体の前方で物を扱うことが多くなってきた。

開口部の一部または両サイドに蓋をすることで、開口部を狭めてプットインの難度を上げると、ボールを持ったまま左右に動かし、開口部を探して入れるようにはなったが、目は余所を向いていることがほとんど。視覚よりも触覚や固有覚に高い優位性のある本児にとって、目と手の協応動作はこの学習においても依然として課題である。また、一般的なプットインの活動に取り組むには、入れ物が強固で、十分な固定がなされていなければならない、手指の巧緻性を求めないレベルであることなどが条件であると考えられ、長期的に本教具で基礎を培っていく必要がある。

